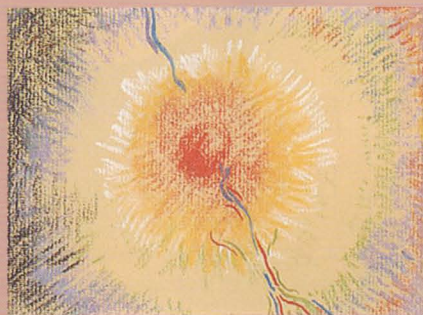


湯浅譲二と駒井哲郎

～オートスライド「レスピューグ」をめぐる～



レスピューグ スライド原画

2007年の春、作曲家・湯浅譲二氏のアトリエを訪ねる機会に恵まれました。この年、当館の開館15周年を記念して「湯浅譲二によるYuasa Joji展」が企画開催され、その準備のために湯浅氏のアトリエに伺ったのです。リビングから二階へと続く階段の壁には、銅版画家・駒井哲郎の若き日の作品が大切に飾られていました。

湯浅譲二氏（1929年生まれ）は、国際的に第一線で活躍する郡山市出身の作曲家です。1952（昭和27）年、湯浅氏は若き前衛芸術家グループ「実験工房」に参加し、同じ年にメンバーに加わった銅版画家で慶応義塾大学の先輩でもあった駒井哲郎との交流が始まりました。諸芸術のジャンルを超えて活動を行った「実験工房」は、詩人で評論家の瀧口修造を指導的役割として1951（昭和26）年に結成され、美術家の北代省三、山口勝弘、福島秀子、佐藤慶次郎、写真家の大辻清司、音楽評論家の秋山邦晴、作曲家の武満徹、鈴木博義、ピアニストの園田高弘らが名を連ねていました。そうした中、1953（昭和28）年9月に開催された実験工房第5回発表会において、駒井哲郎と湯浅氏が共同制作した「レスピューグ」が上映されます。それは、スライドとテープが連動して動く新しい機器オートスライド^{※1}を使用し、映像と音楽のインターメディア的な作品でした。駒井が構成を、湯浅氏が音楽を担当した「レスピューグ」の他に、第5回発表会では、「見しらぬ世界の話」（北代省三・構成／武満徹・脚色／湯浅譲二、鈴木博義・音楽）、「水泡は創られる」（福島秀子・構成／福島和夫・音楽）、「試験飛行家W.S 氏の眼の冒険」（山口勝弘・構成／鈴木博義・音楽）のオートスライドによる3作品が上映発表されています。

「レスピューグ (Lespugue)」とは、フランスの詩人ロベール・ガンゾ（1898-1995）による詩の題名であり、南仏ガロンヌ県の地名です。詩の中では、この地から出土した先史時代の像「レスピューグのヴィーナス」をモチーフに、古代への情熱が官能的に謳われています。

30枚ほどあったとされるスライド原画は、それぞれ約16×12cmの大きさの紙に不透明水彩絵具とパステルによって抽象的なモチーフが描かれています。スライドとして想定された順番や画面の天地は不明ですが、ガンゾの詩から想を得た一連のイメージが有機的に次々と展開してゆく映像を思い描かせます。快い即興性を感じさせる鮮やかな色づかいには、駒井の銅版画作品につながる豊かな色彩世界が拓かれています。一方湯浅氏は、テープを逆回転することを想定しながらピアノ曲の終わりから始めに向かって譜面を書き、フルート演奏を加えて逆回転に再生させるといった実験的な手法で臨みました。時間と逆行している音など誰も聴いたことのなかった時代に、ミュージック・コンクレートという^{※2}新たな音響世界への扉を開いたのです。

「何日間もの連続徹夜での制作の末に開かれたコンサートの日に、会場の第一生命ホールで私はヘルツ・ノイローゼで倒れ、友人が薬局に走ってくれたりするあわただしさの中に、駒井さんはアルコールを大部入れて現れた。」（『プリントアート』17号、1974年）後に湯浅氏は、親しみを込めてこう回想しています。残念ながら、上映されたオートスライド作品についてはスライドも音楽テープも残されていません。ふたりが手がけた「レスピューグ」はどのような作品だったのでしょうか。駒井が描いたスライドのための原画と、湯浅氏が作曲したミュージック・コンクレートのための原譜が、発表当時の内容を今に伝える貴重な手がかりとなっています。

「実験工房」は結成されてから60年近くの年月を経ましたが、解散されたわけではありません。銅版画家・駒井哲郎と作曲家・湯浅譲二。共に既存概念や権威に囚われず、芸術上それぞれの個性を際立たせながら、ふたりの芸術家は時を超えて実験精神と信頼を分かち合っているのです。

（永山多貴子）



レスピューグ スライド原画

※註1 オートマチック・スライド・プロジェクター
株式会社ソニーの前身東京通信工業が教材として開発した。
※註2 テープに録音された具体音を素材に、逆回転や変速など機械的に加工・変形してつくられた音楽。